

Title	猪苗代兼寿『狭衣物語抄』の関連資料
Author(s)	川崎, 佐知子
Citation	詞林. 31 P.59-P.71
Issue Date	2002-04-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67483">https://doi.org/10.18910/67483</a>
DOI	10.18910/67483
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 猪苗代兼寿『狭衣物語抄』の関連資料

川崎 佐知子

## 一 目的

近年、三谷栄一氏の「狭衣物語」に関する諸論考が、「狭衣物語の研究〔伝本系統論編〕」（平成十二年 笠間書院）に集成された。刊行時に書き下ろされた「狭衣物語研究小史―序にかえて―」には、明治以降の研究史が含まれており、一時代を築いた碩学の研究的基盤をうかがわせる。そのなかで、三谷氏は、入江相政氏「狭衣物語」（『岩波講座日本文学』第六卷 昭和六年 岩波書店）を、「狭衣物語」の本格的研究書の嚆矢」として、第一に掲げる。同時に、三谷氏の主要な業績でもある伝本系統論に携わった研究者に、「校本狭衣物語」（巻一〜巻三 昭和五十一年 桜楓社）で著名な中田剛直氏のほか、片寄正義氏を数えるのである。入江氏と片寄氏は、三谷氏の「狭衣物語」研究の、とりわけ、その始発期に、少なからぬ影響を与える存在であったと察せられる。

ところで、この両氏は、共通して、猪苗代兼寿「狭衣物語

抄」に言及している。これにより、昭和初期の当時、「狭衣物語抄」が、すでに、価値ある研究対象と重んじられていた事実をうかがい知るのである。とくに、入江氏が、前掲論考において、「狭衣物語抄」（国立国会図書館蔵本）の注釈史上の位置づけを明確にした功績は大きく、三谷氏の伝本系統論への活用、久下裕利氏の詳細な内容分析など、数々の成果を導き出す端緒となり得た。しかし、本稿で注目するのは、いまひとつの片寄正義氏論考である。「狭衣物語」の諸伝本を、「流布本系統群」と「異本系統群」との二系統に大別した伝本系統論であるのだが、なかで、片寄氏は、「狭衣物語抄の成立を知る上に貴重な資料」に触れるのである。このいわゆる「兼寿書き入れ本」は、物語本文の行間に、本文と同筆の書き入れがあり、しかも、その書き入れの内容は「狭衣物語抄」に一致するという。まさしく兼寿の注釈的営為を解明するに適切な一資料として期待されるのだが、片寄氏の指摘を容れて、具体的な検討に及んだ考察は出ていないようである。

さきに、「狭衣物語抄」の現存諸本三本（宮城県図書館伊達文

庫蔵本・阪本龍門文庫蔵本・国立国会図書館蔵本)を紹介し、各本文の比較を試みた。本稿は、その結論「作成当初に最も近い本は宮城県図書館伊達文庫蔵本である」を前提としている。また、近世初期の猪苗代家に関する諸資料を博搜した綿拔豊昭氏は、宮城県図書館伊達文庫蔵本を兼寿筆と断じ、仙台伊達藩主綱村、あるいは、吉村にあてた献上本であるかとする新見解を提示した。これらを踏まえつつ、「狭衣物語抄」の関連資料を検討し、その資料的価値を確認することが、本稿の目的である。

## 二 兼寿書き入れ本

片寄正義氏が紹介した兼寿書き入れ本は、つぎの二本である。それぞれの解説を、片寄氏が用いた呼称とともに引用する。

### ○池田亀鑑氏蔵本四冊

元・亨・利・貞と題する美濃袋綴十一行本で第三巻の奥には

延宝六年五月二日一校了

第四巻の奥に

延宝六年五月十三日一校合書入等訖

とある。さて本書は狭衣物語抄のよれる本文で、抄の著者猪苗代兼寿の所持せるものなるべく、書入校合等は帝

国図書館蔵の狭衣物語抄と全く一致する。即ち本書は狭衣物語抄の成立を知る上に貴重な資料となるものである。因に抄は天和二年に成立せることこの奥書に示す所なり。

### ○竹柏園文庫蔵本四冊

元・亨・利・貞と題する一本で、書入校合等は全く前記、池田氏蔵本と同じく、狭衣物語抄と一致するものである。但し書写成立が承応以後なることは本文と同筆にて承応三年版本所収の傍註を記入して居るによつて明白である。

両本とも、本文の行間に、注や校合の書き入れがあるという特徴を有し、その内容は、「狭衣物語抄」に一致するとされている。ゴシックで強調した池田亀鑑氏蔵本識語の「延宝六年五月二日」(巻三末)・「延宝六年五月十三日」(巻四末)は、「狭衣物語抄」の奥書「天和貳年林鐘上旬 法眼兼寿(花押)(宮城県図書館伊達文庫蔵本)よりも以前であることが確実なため、兼寿書き入れ本が、「狭衣物語抄」の作成過程を解明するに有用とされている点も首肯できる。

残念ながら、池田亀鑑氏蔵本に関しては、現在の所在を確認できていない。一方、竹柏園文庫蔵本は、現在、天理大学附属天理図書館に蔵される「狭衣物語 附系図年立」(函号 913・37・13)である。以下、現所蔵者に従い、同本を「天理図書館蔵本」と呼称する。書誌はつぎのとおりである。

写本四冊。二十七・四種×二十・一種。袋綴。表紙は墨紙(天藍、地紫)で、金泥の二重線を横に引く。外題「狭衣物語 元(亨・利・貞)」「(左肩に打付書。見返本文共紙。本文料紙楮紙。遊紙は各巻首尾に各一丁(ただし、巻二尾はナシ)。内題「狭衣物語景図」「狭衣物語年立」。每半葉十二行。墨付81丁(巻一)、68丁(巻二)、86丁(巻三)、101丁(巻四)。印記「安井藏書」(朱印、巻首・尾とも)、「天理図書館蔵」(巻二・巻四の各巻首)。本文行間に本文と同筆の書き入れあり(墨、系線は朱墨)。

天理図書館蔵本の第一冊は、系図(墨付計6丁)と年立(墨付計10丁)を合綴する。この系図と年立については後述する。同本には、池田亀鑑氏蔵本の巻三末・巻四末にあるという延宝六(一六七八)年五月の識語が見あたらない。よって、その書写年次、あるいは、池田亀鑑氏蔵本との書承関係が問題となるであろう。さきに引用した片寄正義氏論考の解説が、「承応三年版本」(承応三年版「狭衣」の物語本文)との関連に注目していたのは、天理図書館蔵本の書写時期を意識したものであろうか。

このほか、実践女子大学山岸文庫に、山岸徳平氏による新写本二冊(物語巻・巻二のみの零本)が蔵されている。同本第一冊末に、山岸氏は、つぎのように記している。

兼載狭衣抄摘出流布本狭之書入者也  
兼寿書入本池田氏蔵之 其転写本

為佐々木信綱氏之蔵矣

奥書「延宝六年五月十三日一校合書入等訖」

「池田氏」、「佐々木信綱氏」の名とともに、「兼寿書入本」とあるうえ、引用の「奥書」は、片寄正義氏論考所載の池田亀鑑氏蔵本の巻四奥に一致する。したがって、山岸氏が書写した本は、池田亀鑑氏所蔵の兼寿書き入れ本であったと認められる。

右の識語には、「狭衣物語抄」や兼寿書き入れ本に対する山岸氏の考証がみえる。一行目の「兼寿狭衣抄摘出流布本狭之書入者也」は、猪苗代兼寿の「狭衣物語抄」が、「流布本狭」の本文行間に存する書き入れを抜き出したものという意と解せる。「流布本狭」が何を指すかは、この限りでは判然としない。たとえば、これを承応三年版本と捉えることもできよう。その場合、兼寿書き入れ本は、承応三年版本と同一ということになる。しかし、つぎの行に、とくに「兼寿書入本」と記されるため、承応三年版本とは区別されているようである。「流布本狭」は、広義の「流布本系統の本文」と解釈するべきだろう。ただし、片寄氏も、承応三年版本との関係に言及していたごとく、両本の関連性は否定されるべきではない。この点については、のちほど詳しく論じる。

山岸氏は、二本の兼寿書き入れ本の書承関係にも触れて、佐々木信綱氏の竹柏園文庫蔵本(本稿では天理図書館蔵本)を、池田亀鑑氏蔵本の転写であると断じている。ただし、天理図

書館蔵本の筆跡は兼寿自筆に近く、装丁からも江戸初期頃の書写とするのが妥当と思われる。同本は、延宝六（一六七八）年五月からあまり隔たらない時期に、池田亀鑑氏蔵本を、兼寿自身が転写した本といえるのかもしれない。

なお、実践女子大学山岸文庫蔵本の本文行間には、若干の本文校合が書き入れられるのみであり、「狭衣物語抄」の注にあたる記述は見いだせない。片寄正義氏論考の解説や山岸徳平氏の識語から推測して、原本には、全巻を通して、相当量の書き入れが存在していたことは確実といえそうである。転写の時点で、池田亀鑑氏蔵本の書き入れだけが省かれたとも考えられるが、実践女子大学山岸文庫蔵本の本行の物語本文は、流布本系統の天理図書館蔵本の本文とは異なっており、<sup>(12)</sup> たんなる省略とは受け取りがたい。あるいは、別の本の識語が混入しているのであろうか。原本の所在がわからない現状では、確認は困難である。すくなくとも、本稿では、行間の書き入れを重視するため、実践女子大学山岸文庫蔵本は、考察の対象外とする。

### 三 兼寿書き入れ本と「狭衣物語抄」

延宝六（一六七八）年五月の識語「池田亀鑑氏蔵本」に拠れば、兼寿書き入れ本は、天和二（一六八二）年の奥書を有する「狭衣物語抄」の先行資料と想定し得る。これを、内容から裏付

けることは可能だろうか。すでに、兼寿書き入れ本の書き入れと「狭衣物語抄」の注を、同一とする説も提示されているが、あらためて両資料を比較する。

物語卷三、一品宮降嫁の準備が進められていく一方で、困惑する狭衣の心情が描写されている（新潮日本古典集成下巻77〜78頁に相当）。この場面について、はじめに、兼寿書き入れ本（天理図書館蔵本）から、つづいて、「狭衣物語抄」（宮城県図書館伊達文庫蔵本）から、それぞれ引用する。対応箇所を明確にするため、「狭衣物語抄」が注釈対象として立項する物語本文の語句をゴシックとし、ア・サの符号を付した。また、本文には、適宜、句読点を施した（以下の引用も同様）。

さかの院の、むかしより殿の御心さしにおとらす、哀にかたしけなかりしをたに、此方さまにはみしらぬやうにてやみにし物を、けに、その折はおもふ心ひとつによりてそかし。今は、さりととも、心より外に世になからへてん限、かゝる独住にても有はてぬやうも有なむを、されと心より外に、なけの哀もかゝる折にや、その心もたかはむ、こんよのあまと成ても、さらにかつかてはやむましき御有さまに、すこしもかよはさらむ人をは夢にも見まうければ、さはかりはかなき世に、をのつからなけくくも過なまほしく、あるまじかりける事と、かたつ<sup>高院</sup>の御契を見はて、後は、かく心より外に世になからふるにては、さてこそあらましか。されは今はかたく

世になありそと仏などのしめし給ふなめりとみえつれば、ひとへにおもひ立事ひとつよりほかの心なき物を、かのつらき物とおほしはて、そむき捨給よし御心に、いかなる心にてかくよつかぬ独住にて過たるそとたに聞れ奉らんと、すへて、何事も、露斗心にあらぬ所ありて、此人々にすこしもをとりたらん人をは、みすきかしの、かくなげくもはかなき世のもの槩の程はをのつから過なむとのみおもひ取給へるにかく芹つみし世の人にも問まほしき御心の内、いふ方なかりけり。心にかゝりてゆかしく哀におほされし忍ふ草も、露しらまほしからすうらめしく成給ひて、そのわたりかきたえ、あなかなりしよなくの立聞も、例のくせなれば、くやくわりなし。

(天理図書館蔵本第三冊34丁下同ウ)

ア 此かたさまには 入道宮嫁娶の事には嗟峨院の御心にもしたかひたまはさりし也

イ おもふころひとつによりてそかし 齋院也

ウ されと心よりほかに 心より外に一品宮などへ嫁娶ありてなけの情もかけ給は、いま、ての本意もたかはむとなり一品宮の事にあらず惣しての女に情をかけ給ことも出  
来なは入道宮へのこゝろさしはたかはんとおほしたる也  
エ こんよのあまとなりても 入道宮の事

オ かつかてはやむましき あまと云よりいへり逢度思給心

なり

カ すこしもかよはさらむ 入道宮より形のおとりたる人は夢にも見ましきとなり

キ かたつかたの御契を 源氏宮齋院に成給て後ほと云心也  
ク かのつらき物とおほしはて、 入道宮の心を察して狭衣の心中也

ケ もとの槩のほとは すゑの露もとの雫や世中のをくれ先  
たつためしなるらん存命の間ほと云心なり

コ 芹つみし世の人にも せりつみしむかしの人もわかこと  
く心に物のかなはさりけん 一品宮の事狭衣の心に曾承  
引なき事なればなり

サ 忍ふ草も 飛鳥井腹の姫君をゆかしく思給て立聞なとし  
給しゆへかやうの名も立ける故に此姫君もうらめしくな  
りたる也

(「狭衣物語抄」第二冊18丁下ウ、20丁下ウ)

天理図書館蔵本の書き入れと、「狭衣物語抄」の注釈とは、必ずしも合致していない。相違点は、「狭衣物語抄」において、傍線、および、囲みをした部分である。「狭衣物語抄」のア・ウ・キ・コでは、天理図書館蔵本の書き入れと共通する内容のほかに、傍線部がある。また、オ・サは、天理図書館蔵本に書き入れがないにもかかわらず、「狭衣物語抄」には、囲みをした項目が立てられている。

これらは、行間の書き入れが「狭衣物語抄」にまとめられ

た際に、あらたに増補されたと考えるべきだろう。たとえは、ウは、うわべだけの愛情と独住をつらぬく本意とに懊惱する主人公狭衣の心情に対する分析である。天理図書館蔵本の行間には、「心ヨリ外ニ一品宮ナトへ嫁娶アリテナケノ情モカケ給ハ、」とあり、かりそめの愛情を一品宮との結婚に限定し、「今マテノ本意」と対比させている。「狭衣物語抄」のウも、前半は同様であるが、つづく傍線部で、「一品宮の事にあらず」と前半部分を否定し、「惣しての女」を指すと改める。さらに、狭衣の本意は、「入道宮（嵯峨院女二宮）へのこゝろさし」であるとし、より具体的な説を提示する。以上は、兼寿書き入れ本の書き入れを踏まえ、補足訂正を経た結果といえるのではないか。

奥書等により想定した「兼寿書き入れ本から『狭衣物語抄』へ」という先後関係は、両資料の記述内容からも裏付けることができた。兼寿の注釈作業は、手元に所持していた物語本文の行間に、注を書き入れることから始められたのである。書き入れは、加筆修正を経て、やがて、独立した注釈書にまとめられた。このような経緯で、『狭衣物語抄』は作成されたと考えられる。

#### 四 承応三年版本との関係

「狭衣物語抄」として結実する兼寿の注釈作業は、兼寿書

き入れ本における書き入れから始まったと思われる。では、書き入れの際には、何がよりどころとされたのだろうか。兼寿書き入れ本の書き入れには、承応三年版本の本文行間の傍記が取り込まれているという<sup>(5)</sup>。こうした指摘を参考にして、両本の関連に注目する。

物語卷二、源氏宮の許に、東宮からの文が届けられる。居合わせた狭衣は、その文の片端に和歌を書き付けて、源氏宮に胸の内を訴える（新潮日本古典集成上巻204、206頁に相当）。

御使のかつけ物ともあまた取いて、これはかれはなと、おとなしき人々して定させ給ふ紛に、御硯の筆をと

りて、有つる御文のはしに、手ならひし給ふやうにて、  
サ衣 ア そよさらイにたのむにもあらぬ小笹さへイすゑはの雪の  
兼寿ウ御書ニ竹ヲカミヨソ給ヘハ、サ衣小笹ニ兼寿ヨセサヘリ  
イ消もはてぬよみしかき芦のふしのまもなど、かきすさみ  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテて見給ふにも、我なからこよなく見所あるを、何事も  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテよふ返はなかりける身なから今一きはをとり聞えさせけ  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテむさきの世のおこなひの程、くちおしき中にも、心にま  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテかせてかきかはし、終にはとおほしたるけしきのうら山  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテしさは、ねたかりけり。ことほりといひなからか斗のこ  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテとさへもこよなくさふらふ物かな、いか、御覧すると  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテまいらせ給ふを、ちかくさふらふ人々、いとしたりかほ  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテなる御けしきかなとてわらへは、我も打ほ、オチあみ誠にも  
兼寿ウ御書ニ兼寿ササキトテえさふらふまじやいかにくとせちに申給へは、見ると

もなくて打そはみてをかせ給へるは、あな、おほつかなのわさやとて引やり給ふを、大納言の君と云人、給はせよ、みくらへ侍らんと聞ゆれば、いてやすけなげなめれ<sup>給心中也</sup>は、まいてはかくしう見ない給はしとて、こまかくとやり給つ。

(天理図書館蔵本第二冊40丁ウ〜41丁ウ)

アそよさらに 狭衣哥 春宮の御哥に竹の雪にわか身をよそへ給へは狭衣は小笹の雪に身をよせたまへりたのむにもあらぬは東宮のごとくに我はたのみをもえかけぬ身なると也

イみしかきあしの なにはかたみしかきあしのふしのまもあはて此世を過してよとや

ウなにこともよふ返は 何ことも東宮にをよふへき身にてはなけれとも一きはおとりたる宿因にて源氏宮をも心にまかせざることよとねたくおもひ給なり

エことわりといひながら 狭衣詞手跡なとさへおとりたるとて右の哥を源氏宮へみせ給なり

オ誠にもえさくらふましや 春宮へ參給は、是ほとも近付事はなるましきとなり

カ大納言君 源氏宮女房也

キいてやすけなげなめれは 狭衣詞源氏宮の御覽しもいれぬを恨給心中也

〔狭衣物語抄〕 第一冊84丁ウ〜85丁ウ)

右のアーキを中心に対照するかぎり、天理図書館蔵本の書き入れと『狭衣物語抄』の記述に差異はみられない。つぎに、承応三年版本の対応箇所を引用する。

御つかひのかつけ物共あまた取いで、是はかれはなど、おとなしき人々してさためさせ給ふまきれに、御すゞりの筆を取て、ありつる御文のはしに、手ならひし給ふやうにて

アそよさらにたのむにもあらぬ小ざ、さへすゑ葉のゆさのきえもはてぬよみじかきあしのふしのまもなどかきすさみて見給ふにも、我ながらこよなく見所あるを、なに事にもよぶまではなかりける身ながら、今ひとときはととり聞えさせけん先世のおこなひの程、くちおしき中にも心にまかせてかきかはし、つるにはとおぼしたるけしきのうらやましさは、ねたかりけり。ことわりといひながら、かばかりの事さへもこよなくさぶらふものかな、いかゞ御覽するとてまいらせ給ふを、ちかくさぶらふ人々、いとしたりがほなる御けしきかなとてわらへば、我も打ほ、ゑみ、誠にもえさくらふましやいかにくんとせちに申し給へば、見る共なくてうちそばみてをかせ給へるは、あなおほつかなのわさやとて引やり給ふを、大納言の君といふ人、給はせよ、みくらべ侍らんとしう見ない給はしとて、こまかくとやり給ひつ。



(承応三年版本 上巻333〜335頁)<sup>16</sup>

天理図書館蔵本で書き入れがあるア・キに関しては、承応三年版本にも傍記がある。また、ア・オ・キのように、傍記の文辭が重なる場合もある。このように、両本の本文行間の記述には、少なからぬ共通点が見いだせるのである。

たとえば、アは、呉竹に積もる白雪にこと寄せて、源氏宮入内を期待した東宮歌「頼めつつ幾世経ぬらむ竹の葉に降る白雪の消えかへりつつ」(新潮日本古典集成上巻203頁)を踏まえ、自らの気持ちを訴えた狭衣歌である。承応三年版本の行間の「小篔ハさ衣の身にあて、東宮の事を含ませたり」は、「小篔」を狭衣とし、東宮との対比を指摘するようだが、意味が判然としない。一方の天理図書館蔵本には、承応三年版本とほぼ同じ箇所「小篔さへ」云々の右傍に、「サ衣ハ小篔ノ雪ニ身ヲヨセタマヘリ」とあり、さらに、その前後に、「春宮ノ御哥ニ竹ノ雪ヲワカミニヨソへ給ヘハ」と「タノムニモアラヌハ東宮ノコトクニハ我ハタノミヲモ得カケヌ身ナルト也」とが加わる。狭衣が自身を「小篔ノ雪」にたぐえたとするのは、狭衣を「小篔」とした承応三年版本に比して正確である。それが、東宮歌の「竹ノ雪」に対するという指摘や、そこにこめられた意味を示した点も、承応三年版本より具体的であるといえる。オ・キも同様で、承応三年版本の傍記に比べると、天理図書館蔵本のほうが詳しい記述となっている。

比較をとおして、兼寿書き入れ本の書き入れは、承応三年

版本を受け、それを詳細にしたものであることが確かめられた。その注釈作業にあたり、兼寿は承応三年版本の傍記を参照していたと思われる。

ここで、先行注「狭衣下紐」の該当箇所を掲げる。

一哥そよさらに さ衣哥也小篔さはさ衣の御身にあて、春宮の御事をふくませ給へり

一みじかき引難波渦みじかき昔のふしのまもあはてこの世を過してよとや

一なに事にも をよぶへきならね共ことに春宮、源氏宮ゆへいま一きはとむつかしき詞也

一ことはりといひながら 如此のをとりたる物かなとていかゞ御覽ずるとてまいらせ給へりあたりの衆さ衣おほしめすま、なるとわらへば我もはさ衣也

一えさぶらふ こ、ほどにちかづく事あるましき事と也  
一うちそばみ 源氏宮也

一引やり さ衣のあはでこの世なとあるゆへ也  
一いてや 源氏宮御覽しも入ぬと也

(承応三年版「狭衣下紐」 下巻465〜466頁)<sup>17</sup>

天理図書館蔵本伊の引歌が指摘されるなど、項目の立て方は、承応三年版本よりも、むしろ、「狭衣下紐」のほうが、天理図書館蔵本に近いように見受けられる。「狭衣下紐」に関しては、兼寿書き入れ本、「狭衣物語抄」とも、書名が散見できる。

花かづみ 花巻井巻、下様ノ取イカ、此等ノ心ハ加比ルクニカスルモノ異州ノカラハナクエテシニル  
なむ ミヤノイニセ  
花かづみかつみなるたにもある物をあさかの沼に水やたえ

(天理図書館蔵本第一冊39丁下)  
承応三年版本と同様、「狭衣下紐」も、参考資料であつたと考えられる。

## 五 系図・年立

前述のとおり、天理図書館蔵本には、同筆の系図と年立が合綴される。系図は、物語の登場人物の血縁関係を示したものであり、それぞれの人物には略歴が添えられている。年立は、物語各巻の展開の略述である。ともに、全四冊からなる天理図書館蔵本の第一冊のうち、物語本文巻一の前に置かれる。内題に、「狭衣物語景図」(以下、「系図」と称する)、「狭衣物語年立」(以下、「年立」と称する)とある。

このほか、阪本龍門文庫には、「狭衣物語抄」とともに、同装同筆の「狭衣系図並年立」(全一冊)が伝わる。また、九州大学附属図書館音無文庫蔵「狭衣物語抄」(全一冊、函号545・サー1)にも、「系図」と「年立」とが合寄せられている。同本の書誌は、つぎのとおりである。

写本一冊。新装帙入。袋綴冊子本。二八・〇糎×二〇・〇糎。青色紙表紙。外題「狭衣抄 完」(左肩、白無地題箋)。本文料紙楮紙。遊紙巻首巻尾に各一丁、および、第

60丁と第61丁の間に1丁。内題「狭衣物語景圖」(墨付第125丁)、「狭衣物語年立」(墨付第132丁)。每半葉十五行。墨付140丁。墨付第1丁に、印記「牘庫」(朱印)、「九州帝国大学図書印」(朱)、「九州帝国大学 / 昭和5・3・15」(黒印)、「音無文庫」(朱印)。

このように、兼寿書き入れ本と「狭衣物語抄」は、「系図」と「年立」とともに蔵される場合が多い。これらは、一組の資料としてまとまつて伝来した可能性があるように思われる。

ところで、同じように、注釈書類とともに伝わる物語本文に、承応三年版「狭衣」がある。全十六冊の構成は、物語本文(十冊、本稿では「承応三年版本」)に、「狭衣下紐」(四冊)、「狭衣系図」(二冊)と「狭衣目録並年序」(二冊)である。承応三年版「狭衣系図」は、三条西実隆作の一本に、一華堂切臨が増補改訂を加えたものである。また、「狭衣目録並年序」は、跋文に、一華堂切臨を作者として明記する。これらの内容は、兼寿書き入れ本や「狭衣物語抄」に合綴された「系図」・「年立」と、無関係ではないようである。

承応三年版「狭衣系図」と「系図」(天理図書館蔵本第一冊に合綴)から、主人公狭衣の父「堀川大臣」に関する記述を抜き出してみる。

堀川大臣 ほりがわ のおとこ 御母同后腹と一卷に見えたり  
一条院嵯峨院のひとつ后腹也た人にて成て御うしろみつかふまつり給ふ狭衣大将の父也 さうらのもの

私六十四代圓融院の二の御子に比す一卷に関白とあり  
二條堀川也四巻におりゐの御門になれり堀川院と号す

(承応三年版「狭衣系図」 下巻608頁)

堀川大臣御母同私六十四代円融院ノ二ノ御子ニ比ス一卷

関白トアリ四巻堀川院

(系図) 天理図書館蔵本第一冊(2丁)

ゴシックにした部分には、共通する内容が記載されている。どちらも、「私」とあるのに気づく。承応三年版「狭衣系図」における「私」は、一華堂切臨により補われた、同本に特有の説である。したがって、ほぼ同内容である「系図」の「私」説は、承応三年版「狭衣系図」を受けているとみなされる。「系図」は、承応三年版「狭衣系図」を加筆修正のうえ、編み直されたといえるだろう。

つぎに、承応三年版「狭衣目録並年序」と「年立」(天理図書館蔵本第一冊に合綴)とを比較する。

### 巻第二之上

冬飛鳥井姫君のゆくゑを大将したひ給ふ

正月さ衣の中納言大納言になり佐大将かけ給ふ

○大殿勅をうけ給はり大将へ女二宮を北方にとの給ふ

○さ衣弘徽殿へ忍ひ入て女二宮に会合せしかば若宮を姫めり○女二宮の母大宮あけほの、比大将のふところ紙を女二宮のそばにをとし置給ひしを見付給へり

○大将は女二宮に合たる暁に中宮のかたへゆきて夜を

あかし後朝の文をかき給ふ○中納言佐大将の後朝の文を女二宮へたてまつる

三月女二宮悪阻にてわつらひ給ふ

暑比女二の乳くるみたるを母大宮見付て妊としり給ふ

○父帝女二宮のわづらひをみまひにわたらせ給ふ

○女二宮のわづらひ養生に里へおり給ふ母大宮も

○大宮四十五六也女二宮の妊給ふをかくして母大宮の懐妊と奏す

十月若宮誕生あり大宮の御産と奏す○帝より御はかしなと例の作法あり

(承応三年版「狭衣目録並年序」 下巻577〜579頁)

### 二巻

狭衣君慕飛鳥井君給事 道芝之哥有

道成従筑紫遣書於京都告妻女卒去之由事

△狭衣君廿歳

但十九歳廿歳不分明狭衣君始過飛鳥井君給事十八歳五月六日之内也筑紫下向八月之比トミユ然所ニ懐妊之由有テ卷ニ七八ヶ月トアリ依之物語之面ニハミユサレトモ翌年之事ト知ヘシ然上ハ大納言ニ任スル年ハ廿歳也

今上御対面堀川殿之次笛之録御物語之事女二宮御事也

狭衣君任大納言掛大将事

父公進女二宮嫁娶於狭衣君給事

狭衣君於弘徽殿忍会合女二宮事

皇太后宮見付狭衣之懐紙給事

忍遣後朝文於中納言佐給事

狭衣君不給忘飛鳥井君事

中納言佐語見付大宮懷紙給事 於狭衣君事

暑比大宮見付女二宮之懷妊給事

依女二宮之違例主上渡御弘徽殿事

大宮並女二宮退出宮中事

冬之初奏大宮之御懷妊之由事

実ハ女二宮也

狭衣君參大宮之方給事

若宮誕生事

〔年立〕 天理図書館蔵本第一冊7丁行、8丁行）  
物語卷二冒頭から若宮誕生までに相当する箇所を引用した。  
承応三年版「狭衣目録並年序」のゴシックは、物語の本文中より抜き出された年次などを示す語句であり、これを基準に、物語の進行が整理されている。一方の「年立」は、ゴシックの主人公の年齢を軸とするのが特徴である。本文中に年齢が明示されない場合も、傍線部のように、徹底的な考証がなされている。「年立」は、承応三年版「狭衣目録並年序」に近い内容ではあるが、根本的な組み立て方が異なるのである。  
〔系図〕と「年立」は、承応三年版「狭衣」のうちの「狭衣系図」・「狭衣目録並年序」を意識して作られているようである。編著者を明らかにする記述はいずれにも見いだせないが、兼寿と考えるのが妥当だろうか。

## 六 まとめ

兼寿書き入れ本は、本文行間に注釈が添えられた承応三年版本の形態に似通ううえ、書き入れの内容も、承応三年版本を前提として考えると考えられる。また、合わせて伝わる「系図」と「年立」は、承応三年版の「狭衣系図」・「狭衣目録並年序」の再編成といえる。兼寿が承応三年版「狭衣」を参照していたことは、その活躍時期に照らしても、決して矛盾しない。

しかし、何よりも注目すべきは、承応三年版「狭衣」との構成上的一致である。兼寿書き入れ本、「狭衣物語抄」、「系図」、「年立」を一連の資料として認識したとき、これらは、承応三年版「狭衣」に収められる四種の資料と、見事に対をなすのである。承応三年版「狭衣」を模範として、兼寿は、注釈書類を伴った物語本文を整えようとしていたのではないだろうか。

兼寿は、当時すでに普及していた承応三年版「狭衣」に匹敵する物語本文を期していた。必然、「狭衣下紐」に相当する新しい注釈書が求められることになる。このように考えると、猪苗代兼寿の「狭衣物語抄」を単独で評価するのは、適切ではないように思われてくる。その真価の追究には、関連資料をも視野に含めた見地が不可欠なのである。

注

- (1) 三谷栄一氏編著『九条山蔵本狭衣物語と研究』下(未刊国文資料 第二期 昭和三十八年 未刊国文資料会)、および、岩波日本古典文学大系「狭衣物語」の頭注・補注。
- (2) 久下裕利(晴康)氏「猪苗代家と源氏物語」(『中古文学論攷』第三号 昭和五十七年十月)。同論考は、「狭衣物語抄」が「狭衣下紐」の内容を補完することや、現在までの「源氏物語」からの影響引用論が、「狭衣下紐」と「狭衣物語抄」では網羅されることを説く。
- (3) 片寄正義氏「狭衣物語伝本考」(『国語』創刊号 昭和十一年七月)。
- (4) 拙稿「猪苗代兼寿『狭衣物語抄』に関する考察」(『古代中世文学研究論集』第一集 平成八年 和泉書院)。
- (5) 綿拔豊昭氏「近世前期猪苗代家の研究」(平成十年 新典社)。なお、同書において、綿拔氏は、国立国会図書館蔵本の筆跡についても、兼郁筆かとしている。
- (6) 前掲注(3) 片寄正義氏論考。
- (7) 東海大学附属図書館桃園文庫にも該本は見いだせない。なお、『土岐武治文庫 和書目録』(平成十三年 花園大学国文学科)に、松浦家蔵本の新写本に、昭和二十七年六月、大覚寺所蔵本の書き入れを朱で転載した「狭衣物語」(新写本、四巻四冊)が収載されている。同本巻末には、朱筆で「大覚寺所蔵本書入」「延宝六年五月十三日以校合/書入等記」ヲ書写ス/昭和廿七年六月廿九日」とあるという。ここに言及される大覚寺蔵本は、池田亀鑑氏蔵本とはほぼ同じ識語であり、しかも、本文行間に相当数の書き入れが存在するようであるため、兼寿書き入れ本である可能性を考えてよいものか。
- (8) 同本は、「竹柏園蔵書」(昭和十四年 巖松堂書店) 385頁に、つぎのように掲載される。

狭衣物語 四冊 大本

江戸初期の善写本。初めに系図、年立あり。本文に書人多し。「安井蔵書」の印記あり。
- (9) 実践女子大学山岸文庫蔵「さころも」(函号<sup>3310</sup>)。『実践女子大学文学芸資料研究所電子叢書I 物語史研究の方法と展望』(CD・ROM 篇)(平成十一年 実践女子大学文学芸資料研究所)に所収。なお、前掲注(4) 拙稿では、実践女子大学図書館の所蔵書目カードの呼称に従い、同本を「猪苗代兼寿作『狭衣物語抄出』」として紹介した。
- (10) 綿拔豊昭氏のご教示による。
- (11) 池田亀鑑氏蔵本が兼寿筆といえるかどうかは問題となるが、先行研究では筆跡への言及がなく、かつ、同本所在不明のため確認できない。二本の書承関係については、ひきつづき検討課題としたい。
- (12) 『実践女子大学文学芸資料研究所電子叢書I 物語史研究の方法と展望』(平成十一年 実践女子大学文学芸資料研究所) 付篇所収の「収録図書書誌」において、上野英子氏も、山岸文庫蔵本を「非流布本系物語本文の新写本である。」と解説し、「流布本」に触れた山岸氏識語と齟齬することを指摘している。
- (13) 前掲注(3) 片寄正義氏論考。
- (14) 『狭衣物語抄』は、宮城県図書館伊達文庫蔵本より同本の冊数・丁数とともに引用した。以下の引用も同様である。

(15) 前掲注(3) 片寄正義氏論考の「竹柏園文庫蔵本」解説。

(16) 承応三年版本は、三谷栄一氏編「狭衣物語」上下(平安朝物語板本叢書1・2 昭和六十一年 有精堂)から同書の巻数・頁数とともに引用した。便宜上、私に句読点を施している。以下の引用も同様である。

(17) 承応三年版「狭衣下紐」は、前掲注(16) 三谷栄一氏編著書より同書の巻数・頁数とともに引用した。

(18) 前掲注(4) 拙稿では、「狭衣物語抄」と「狭衣下紐」との関係について論じた。また、承応三年版本傍記と「狭衣下紐」の関連は、今後の課題としたい。

(19) 阪本龍門文庫に蔵される年立と系図は、前掲注(4) 拙稿で、書誌とともに紹介した。

(20) 承応三年版「狭衣系図」は、前掲注(16) 三谷栄一氏編著書より同書の巻数・頁数とともに引用した。

(21) 承応三年版「狭衣目錄並年序」は、前掲注(16) 三谷栄一氏編著書より同書の巻数・頁数とともに引用した。

(附記) 末筆ながら、資料閲覧等に便宜をおかりいただいた実践女子大学芸芸資料研究所、天理大学附属天理図書館、九州大学附属図書館、そのほか諸機関に、深謝申し上げます。

(かわさき・さちこ) 本学大学院研究生

大阪大学国際日本文学研究集会 講演とシンポジウム

国際化の中の日本文学研究―その課題と方法への模索―  
二〇〇二年三月二日(土)に、表記の大阪大学国際日本文学研究集会を開催しました。

講演

私の日本文学研究体験論―海外の大学と日本の大学の研究環境

関西大学専任講師 マーク・メリ

海外における日本文学研究の現状と問題

明治学院大学教授 マイケル・ワトソン

シンポジウム「留学生にとつての日本文学研究」

司会 伊井春樹/マイケル・スキヤンロン

パネリスト エヴァ・ルカーチョヴァ(スロヴァキア)

金華榮(韓国)

ジェイミー・ニューハード(アメリカ)

謝立群(中国)

ゾーイ・ジュステイコ(イギリス)

チョーティイカブラカライ・アッタヤ(タイ)

オラビー・ワーエル・モハメッド(エジプト)

この研究集会の報告書は冊子本として発刊し、講演とシンポジウムの記録とともに、外国人研究者によるメッセージのほか、日本文学に関する諸問題の小論文を執筆していただき、掲載しました。

執筆者(敬称略・掲載順)

バーバラ・ルーシユ(コロンビア大学中世日本研究所所長)

エドワード・サイアンステッカー(コロンビア大学名誉教授)

ハルオ・シラネ(コロンビア大学教授) 他十七名